

インタビュー

いつも元気、 いまも現役

声楽家

中川牧三氏

101歳



中川牧三 (なかがわ まさぞう)

(声楽家)

(PROFILE)

1902年(明治35年)12月京都市生まれ。1930年に、作曲家で指揮者の近衛秀彦氏に伴われ渡欧。ドイツ・ベルリン国立音楽院に留学後、ミラノ・ヴェルディ国立音楽院と国立スカラ座歌手養成所に日本人歌手として初めて入学し、ベルカントを研究する。第二次世界大戦時には、上海で日本軍のスポークスマンを務めるかたわら、文化担当将校として「上海交響楽団」を指揮し、山田耕筰や朝比奈隆らを招聘。戦後は関西のオペラの基礎を築くほか音楽教育に携わり「ヴェルディ国際声楽コンクール」「日本音楽コンクール」など国内外の審査員を長年務める。1969年に国際水準の審査で名高い「イタリア声楽コンソルソ」を創始・主宰し、審査委員長としてイタリア音楽の普及に貢献。イタリア政府から「カヴァリエレウフィチアーレ」叙勲。「マルタ騎士勲章」、「マルタ・グラン・アンバシャトーレ勲章」を授受。全勲章日本大使、ヴィヴァルディ国際学会名誉会員、日本イタリア協会会長。

日本の声楽 歩調を

中川牧三氏は、穏やかなものごしの中にも終始人なつっこい笑みを絶やさない。とにかく朗らかで、よく笑い、よくしゃべる。180センチのすらりとした長身、しゃんと伸びた背筋、お腹から出される張りのある声。101歳の高齢とは思えないかくしゃくたるさまに改めてびっくりする。

日本におけるオペラの開拓者であり、ベルカントの伝承者として活躍する中川氏。イタリア・ボローニャと日本の自宅を、多いときには年に10回往復し、国際コンクールの審査員や後進への指導など、音楽普及活動を精力的に展開している。

4月には自身の生誕一世紀祝賀記念演奏会に京都フィルハーモニー室内合奏団の指揮を務めたほか、東京コンサートではトークショーに登場し、健在ぶりを披露した。戦前は世界で活躍するテノール歌手として、また、戦後は指導者としてオペラの普及に努める中川氏の音楽に対する情熱は、今も体中にみなぎっていた。

音楽は「好き」の程度じゃない 「めちやくちや好き」

東京・池袋にある東京芸術劇場の地下リハーサル室。4月27日に開催された「マエストロ中川牧三生誕一世紀祝賀記念 ゴールデン・ガーラ・コンサートTOKYO」に向け、中川氏は現役で活躍する若手の声楽家約20人を相手に休む間もなくレッスンを付けていた。

「正しい伝統は一つ。いくつもあるわけじゃない。その一つをぜひやらなきゃいけないよ」

「遠慮しないでいいんだから。もっと元気よく、言葉をいきいきとね」

特別指導教官として招いたマルチェッラ・レアーレ

も世界の水準と 並べていかないと

女史とともに、レッスン室の中央にどっしりと腰掛け、アドバイスを投げかける。舞台に出るタイミングから、歩くスピード、表情・目線の配り方、発音など、マンツーマンの実に丁寧なレッスンは丸一日続いた。

「こんな形式でするのはなかなかないんだよ」と語る中川氏。日本イタリア協会の会長として35年前に創設した、世界に通用する若手声楽家育成のためのコンクール「イタリア声楽コンコルソ」でも、名高い歌手や演奏家、学者などを招き、参加者全員に高い水準の講習を受ける機会を提供。また、毎年、優勝者2名を授業料免除でイタリア国立音楽院に留学させるなど、声楽の技術を磨く機会を幅広く与えている。

中川氏は幼少の頃より音楽に親しむ。バイオリンやオルガンがあるハイカラな家庭で育ち、“カラスの鳴かぬ日はあっても、バイオリンの鳴らぬ日はない”と言われるほど、練習熱心な少年だった。

「音楽は好きという程度じゃないです。めちゃくちゃ好きだった。音楽以外は何もやりたくない。親には何と言われても音楽をやりたくて」と親の反対を押し切って音楽で身を立てることを決意する。「これだ」ということをまっすぐに追究。信念に従って行動してきた。それゆえ“革命児”たる武勇伝も数多く残る。



中川氏を慕う全国の若手音楽家が集まった「ゴールデン ガーラ コンサートTOKYO」は、盛況のうちに幕を閉じた。

反逆じゃないです これが普通ですから

第二次世界大戦時には、中支派遣総軍参謀部幕僚として日独伊外交を遂行し、上海陸軍報道部のスポークスマンを務めた。また、「東洋のパリ」と称された国際都市・上海で文化工作を進める文化振興将校も担当した。

「日本軍が現地の人に強制したり禁じたりしていたことを全部ひっくり返しました。だから、南京にあった上層の参謀本部には非常に受けが悪くてね」。

「当時、上海にあったシンフォニーオーケストラが全然おかしくてね。演奏会では、聴きに來ている外国人を全員立たせて君が代を斉唱させているんです。私が行ってからは、いっさい君が代は演奏してはいかん。聴衆の大半である外国人が喜ぶように」と、あっさり君が代をやめてしまった。「もちろん反逆しようと思っっているわけではない。これが普通のことなのですから」。

アメリカ・ルーズベルト大統領が亡くなったときには、国旗を掲揚。「たとえ敵国であれ国旗は国際的にやらなければならんこと。騎士道精神にのっとって上海の目抜き通りのホテルや銀行などに5本の国旗を立てました。誰にも相談せずに独断でね」。

「当時はどうなことをしても、とにかく中国を攻める、戦争に勝てばいいというめちゃくちゃな方針で、将来のためにどうしたらいいか考えない戦争をしていた。中国の人は日本の兵隊を“東洋の鬼”と呼んでいたんです。こんな状態だと戦争は終わらない、和睦できない。徹底的に勝つことを突き詰めたら勝てないんです。中国人の「ガソリンがほしい」「砂利がほしい」との要請にも即座に対応。ばくちや競馬場の開放も許可する。「どこかで喜ぶことを作っておかないと、全部敵のなかでは何もできない」。

柔軟な発想は近年も衰えない。15年程前、オペラのリハーサルを見学中に「字幕をつけたらどうか、日本の人にも絶対わかりやすくなる」と提案。一番弟子の五十嵐喜芳氏（現、昭和音楽大学学長）が実際に字幕をつけ、大当たりする。日本にオペラブームを巻き起こし、その手法は世界中に広まった。「一番便利な方法だと思ってしたことだから」と既存の概念にあっけなく新しい風を吹き込む。音楽畑にいながらも、常に新しい視点を探求する姿勢はあくまでも自然体だった。

初めて「リゴレット」を見て “まいった”と思いました

中川氏は新交響楽団（現、NHK交響楽団）を創設した近衛秀磨氏に後見人として伴われ、ドイツ・ベルリンの国立音楽院に留学。指揮はオット・クレンペラー、作曲はヒンデミット、バイオリンはカール・フレッシュ、声楽はワイセンボーンら巨匠に師事した。

そのドイツ留学中、イタリア人テノール歌手のリサイタルでベルカント唱法に出会い、人生を大きく変えた。「なぜ、そのような声が出せるのか。どうしても学びたい」と留学を2年で打ち切り、ミラノへ向かう。着いたその日に、当時貴族しかチケットの入手が許されなかったオペラの殿堂・スカラ座で「リゴレット」（ヴェルディ作曲）を観賞。イタリアオペラに大きな感銘を受ける。

「近衛先生と初めてリゴレットを見たときは、腹の底からびっくりして、『もうまいった』と思いましたね。こんなにりっぱで、これだけよくそろえて。二人で一晩中飲んで、感嘆するばかりでした。先生から『何をやるよりも君はイタリアオペラをしっかり持って帰れ』と言われてね。」



遠慮がちに出した手に「握手は手と手をしっかり合わせてするんだよ。」「グラーツィエ」と大きな手で包んでくれた。

とはいえ、「オーケストラや歌、バレエからお芝居、舞台衣装。近衛先生は簡単に『やれ、打

ち込め』と言われるけど、僕一人が打ち込んだってできるもんじゃない。政府の援助があって、関係団体が足並みをそろえてやっても出来ない難しいものでした」。

昭和23年、終戦後間もなく、進駐軍や毎日新聞社の全面的な協力を得て、関西初の本格的なオペラ公演にこぎつける。「最初は大阪と京都で2回ずつやりました。ところが、『化粧をして、音楽をならして女に抱きつくとはけしからん』と大問題になって」。オペラを中心に音楽が発展してきたヨーロッパと日本の意識の違いに愕然としながらも、戦後復興の中、近畿各地で「椿姫」「蝶々夫人」「ルチア」（本邦初演）等数多くのオペラ作品を上演し、関西でのオペラの普及に邁進した。

「なんとか真実を伝えたい。オペラというとなんか“アチャラ風”なことをやっていると思う人がいる。オペラとは“音楽の作品”であって、単に歌って踊るものではない。イタリア発祥のギリシャ悲劇が根底にある芸術性の高い作品。歌やオーケストラ、舞台美術が一体となった総合芸術なんです」。

しかし、明治以降の日本の音楽教育はドイツを師として指導者や音楽家を招聘するという環境で、イタリアのベルカント・オペラに対する知識や理解もほとんどなくその道のりは厳しかった。

「音楽の歴史はイタリアにある。非常に古い歴史で、たどるとそこしかないんです。ドイツ式では競争できない。世界の標準に合わさないといけないと言うんですが、ほとんど通じない。これを打破しないと、国際コンクールで日本の音楽はまともに評価されなくなる」と主張を続けた。

中川氏は、戦後訪れたイタリアで「マエストロほど声のわかる人がもうイタリアにもいない。真にわかる人が審査しないとベルカントがなくなってしまう」と審査員の話をもちかけられる。「『おまえはアルフレッド・チェッキから直接教えてもらった門下生だから、正統なベルカントを伝える義務がある。今年からやれ』とね」。そうしてイタリア・ヴェルディ国際声楽コンクールに日本人として初めて審査員に招かれ、以降欧米各国のコンクールの審査運営に携わっている。「若い人たちは、ベルカントの方向に勉強していますが、まだまだ本当のところを教えられる学校や指導者が少ない」。

音楽をやめたいことは？ “あったら死んでしまうね”

中川氏が今も情熱を込めて探求し続けている「ベルカント」とはイタリアの伝統的な歌唱法で、日本語訳は「美しい声」「良い発声」という意。その人本来の自然な声を引き出すことで、のどに負担をかけず伸びやかに歌うことができる。音域の広いイタリアオペラでは、欠かせない技法だ。中川氏は日本人として初めてスカラ座の歌手養成所に入り、ベルカントを習得した。

「声楽ではイタリア語を正確に発音することが大事なテクニックで、正確に歌えばきれいに声は出ます。日本語とイタリア語は非常に似ていますから、日本人にとってベルカントの習得はやさしいはず。一番簡単なんだけど、簡単なことが難しい。日本やドイツは師匠のまねをする教え方で、先生が歌っているようにやりなさいと教える。だけどイミテーションじゃいけない。楽器である自分の体づくり、コンディションづくりや感情表現は先生や他の人のまねではなく、自分が見いださないと」。

「あんまりベルカントのことは話さないようにしているんだけど」の言葉とは裏腹に、思いは次々とあふれ出る。

「今、オペラは衰える一方です。スカラ座では1週間に3日公演をしていた時期もありましたが、今では一人の歌い手が舞台上上がれるのは年に数回。歌い手は食っていけないから、仕事を変えたり、オペラをやめてしまう。これでは良いのが出てくるわけがないんです。それに、今のオペラは本来とは全然それたところに行っちゃって、どんどん坂をころげ落ちるように形をゆがめ



コンサート前日のリハーサル室にて。いつも娘のくにこさんが付き添いサポート。「すきやきとしゃぶしゃぶと牛乳が大好き」の言葉とおりに、稽古場に牛乳を発見。父が政治家で初代畜産振興会長の要職にあり「赤ちゃんの時は牛乳風呂で育ちました」。



ジャケットにネクタイ、靴、すべてイタリアで求める。ダンディーな着こなしに取材陣一同から「かっこいい」の声が。

ている。みんなCDやテレビを先生としてやっているんだから。世界一の声を聞けても、それではできるはずがない。日本の声楽も世界の標準であるベルカントに合わせ、世界の水準と歩調を並べていかないと。いずれ変わるでしょうが、変わるためには猛スピードでがんばらないと。できるだけ応援したい」。熱い思いを胸に「ベルカントの教育機関を作りたい」とさらなる目標を築く。

コンクール等の合間を縫って、現在も十数人の生徒を自宅で教える中川氏。「歌のレッスンでは、常にコンディションをベストに保つようにしないとイケませんから。声を出していなくても呼吸や横隔膜、背筋などが自然とそういう動きになる、それがいいんじゃないでしょうか」と分析する娘のくにこさん。もちろん生徒と一緒に声を出し、身振り手振りをまじえて感情表現たっぷりに歌うことも度々だ。「父は発声に関しては絶対に妥協してくれません。私が昔、父のレッスンを受けていたときは、「もう死んでしまえ！」と何度言われたことか知りません」(笑)。

「先生の宝物は？」と聞くと、間髪入れず「音楽です」と答える中川氏。「うとうしい時でも音楽を聞けばすぐ治ります。聞かないと寂しい。何か物足りなくてね。だれがなんと言っても好き。だから、今もやれていることは幸せですね」。

「音楽をやめたいと思ったことは？」との問いに、中川氏は満面の笑みを浮かべると「あったら死んでしまうね」と、くにこさんが話しかける。なんと言っても好きな音楽への挑戦と貢献は、二人三脚でこれからも続きそうだ。

●撮影/丹羽 諭 ●文/編集部